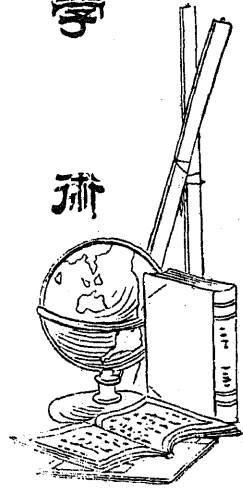


學 術



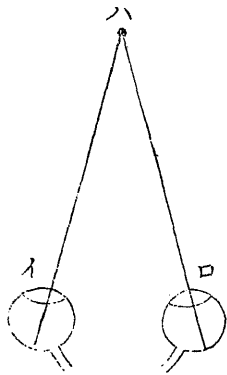
眼の話 (其四)

本郷生

吾等は少時親しむ友どちの集合等に於て、屢次の如き遊びをなしたるに於て、即ち紙捻二本を作り甲は其一本を以て徑一寸計の小環をつくり、乙は他の一本を曲げて鈎となし、片手を以て一眼を塞ぎ他の手を以て鈎を持ち、之を甲が差し出しつゝある環中に入る、遊びでわります。片眼を以ては遠近の距離の判定に至て不十分である

と見れば、容易に鈎が環に入りません、一度は餘りに遠きに失したるかと思へば、次ぎには餘りに近きに過ぐる様なことがありまして、初めてならば随分面白いのではありません。

之は何故でありますか。更に問題を廣くして一体吾人が眼によりて遠近を判定することの出来るのは、何によるのでありませうかと云ふに之には種々の原因がありますが今其内の主なるものを申しますれば第一は



兩眼の方
向がなす角
度の大小で
あります

(上圖角ハイロ)

近くにあるもの、距離の判定、は主として之に由

るのであります。讀者は上圖を視て一考することによりて遠きものを見るときは此角が小さくなり、近きものを見るときは此角が大きくなることを知らるゝであらうと思ふ。人は幼時より長き経験によりて此事即ち距離と此角度との關係を知りますから、遂には角の大小を以て距離を判定することが出来るやうになるのであります。然るに片眼にすれば此角が出来ない、従て其大小を知るに由がない、従て距離が不確かになるのであります。之も其一例ですが、嘗て吾家の近隣に一眼の老翁がありました、此人は田舎の農夫でしたが長き煙管を口にしたがら火箸に火を挟みて之で煙草に火をつけることを屢やりました、然に常に其距離を誤認して或時は遠きに過ぎ、又或時は近きに失し、之を傍觀する吾輩をして屢失笑を禁し得な

らしめたのであります。

第二には眼と其物との間に他の物の見ゆる多少でありませう。間に種々澤山のものが見ゆるときは遠く見ゆ、さなきときは近く見ゆ。誰か大海の邊に立て相對して見ゆる島の見たよりも遠きに驚かざるものあらんやです。長き竿を地上に横へたるときは之れを立て、下より仰き見た時よりも一層長く感ずるも又此一例であります。本年花の咲く頃、吾輩は修學旅行の途次生徒と共に嵐山に行いた、時刻ははや正午を過ぎ頗る空腹を訴へ、足も亦頗る疲れて來たが腰にある行厨は之れを嵐山の麓にて開くつもりであつたから、忍耐して進み行つた。其時眼界の廣い田野の間に於て嵐山を望見し、目的地ははや遠からずと喜んだ、後或る村に入りて垣や塀や籬や木の間に再び之を望みた

るときに、却て前よりも大に遠く見えたので失望した生徒も余程ありました。讀者も少しく注意せられたならかゝる例は屢實驗せらるゝであらうと思ひます。

第三は大さの知れたるものが實際に見る大さによるのであります。同じ大さのものも遠くあれば小く、近くあれば大きく見えます、停車場等に於て瀟車が發車するを見ましても距離の遠くなるにつれて漸々に小くなることは何人も知るところであります。之等の經驗を度々重ねたる吾等は大きさの知れたるもの、例へば人間車馬等が小さく見ゆる度合によりて其地其物の如何程の距離にあるやを知ることが出来るやうになる、實際河の景色等を畫くにしても對岸にある舟や家や人などを、愈々小さく畫けば其河の幅が愈々増して見えますことは

讀者のよく知らるゝところでありませう。

それから其他にも空氣の層とか眼の筋肉の感じとかと云ふものがあります、此等は委く述べる暇がありませんから略しまして、茲に一つ附け加へたきことは前に述べし如く、大さの知れたるものによりて距離を測定するかはりに、吾人は距離を知りて大さを判定することも致しますと云ふことであります。これこれの距離にありて、かく迄の大さに見ゆる故に彼の物は余程大きなものなりなど云ふ話は吾輩の屢聞くところでありませう。日出の大陽は日中の大陽よりも大きく見ゆると云ふも、つまり此考より來る誤りで、日出の際には大陽と吾人の眼との間に原野とか山とか藪とか森とか種々のものがあるによりて、自然距離が遠く思はるゝ、其遠く思ひつゝある眼を以て大陽を見る

のでありますから實際全じ大さの像を網膜上に得ても、其が大さく思はるゝのであります、讀者は晴れ渡りたる夏の夕暮、親しき友垣と共に螢の飛びかふを眺めらるゝ折なぞに、試みに大空に輝ける任意の二つの星を定めて其間の距離幾何位に見ゆるやを諸共にあて、御覽なさい、或人は二尺位といひ或る人は一間位と云ひ、又或人は五間位に見ゆると言て、其歸結の甚區々なるを認めなさるでありませう。之れも各人の頭の中にある地球と星との距離の考へが（勿論漠然たるものですが）様々なるがため起ることで、又以て距離の考が目に見ゆる物の大さを知るに關係する所以を知るに足ります（完）

史傳



節女阿正の傳

米 溪

雪深うして梅蕾春に先だつを知り、時艱みて大節自から顯はる。和平文化の今に際して、此の凜冽の節義を説く、春風和煦の日に嚴霜を見るの感なきに非ざるべきも、世路の崎嶇決して今昔の差あるにわらず。まして人情の薄きこと、吉野紙の其より甚からんとするに當りては、又他山の石たらずんばわらざるなり。山陽背て筑の游あり、節女の事を聞て之を傳す。窓前の竹影風に揺らめく